

あんげろす

この夏宗教部主催『平和を考える旅』で、学生十数名と台湾を訪問した。「霧社」では先住民の方々と日本語で話し合い、日本語が、お互いに言葉の通じ合わない当地部族の人々同士の共通言語にもなっていると聞いて、大変複雑な気持ちを懐かされた。

先住民といえは、歴史的に日本人をはじめとする植民地支配者、そして漢民族という二重三重の支配の最底辺にあって、その人権と生存権を剥奪されてきた人々である。台湾は日本で考えるよりはるかに政治的に緊迫しており、平和に対する危機意識も強いが、これら先住民の人々の人権が深く考えられ、実現されてはじめて平和が訪れるであろう。人権は平和の基礎である。

第二次大戦中台湾に住んだことのあるあるひとが、会話のなかでごく自然に先住民の人々を『蛮族』といっているのを聞くにつけても、われわれ日本人が台湾についてより深く知り、日本人としてのあり方を自ら問うことが必要であろう。

濱野 一郎

第14号

1996.10

